

## 生徒の目線で話を聞く



細川英雄

(三省堂国語教科書編集委員)

### 生徒の目線で話を聞くとは

知り合いの国語教師から最近耳にするのは、生徒が教師の言うことを聞かないという話ばかりである。

ほとんど毎時間の遅刻、クラス内の私語、飲食、自己主張のわりに決まりを守らない、何事も中途半端、そのくせ体面だけは気にする……。もし内容的に興味のあること、彼・彼女らが全身全霊で打ち込めるような環境が用意されるなら、状況は変わってくるのではなからうか。

この『国語表現Ⅰ・Ⅱ』を編集するに当

たって考えたことはこんなことだった。しかし、そのためには、どうしたらいいのだろうか。とにかく彼ら一人ひとりの話を聞くこと、このことを一番忘れていないのは、ほかならぬ教師なのではないか。

これが編集担当者としての私がまず考えたことだ。つまり、教室を彼らの居場所としてどのように保障できるかということだ。「生徒の目線で彼ら・彼女らの話を聞く」とは、彼らへの期待のことばであり、自らへの励ましのことばでもあると同時に、教室を担当する国語教師たちへの、やや辛口のメッセージでもある。

### 自分にしか関心のない生徒たち

では、生徒自身が何かを考えること、生徒自身に何かを考えさせることとは、具体的にどのようなことか。

実際の「国語表現」授業担当者からしばしば持ち込まれるのは、「子どもたちは自分にしか興味がない」という苦情である。

しかし、「自分にしか関心のない生徒」としてこそ、こうした方法、つまり「生徒の目線で話を聞く」ことが有効なのだ。

ことばを身につけようとするのがすなわち他者との関係づくりの活動でもあると指導書の中でも述べたが、「他者との関係づくり」とは、言い換えれば、他者性の認

識ということだろう。

この場合の他者とは「私」にとって常に了解不能の存在、つまりブラックボックスである。他者が何を感じ、考えているのか、「私」にはわからないし、その行動も予測できない。したがって、他者につき合うことは、「私」を不安にさせ、その不安のために、他者に対し「私」はなかなか自分を聞くことができないわけである。

「自分にしか関心のない生徒」が、自分のことにしか興味を示さず、自己の世界に閉じこもりがちなのは、他者に対し「私」はなかなか自分を聞くことができないからだろう。

そういう生徒にとってこそ、一方向的な教授活動から、生徒自身が考える活動へと、教室における「他者との関係づくり」が必要ではないだろうか。

そしてまた、自分の考えていることを他者に向けて発信するという行為は、一方的な授業をしつつ、自分のことばで語る喜びを忘れた教師にこそ、有効なのである。本当に「自分にしか関心がない」のは、生徒たちではなく、むしろ教師たちの現実の姿でもあるのだ。

### 生徒自身が考えていることがテーマ

今までは、「教えるべきもの」が教師の

側に厳然と存在し、それをどう教え、理解させるかが教師にとつての課題だった。教え・教わる状況下では、どのように話し掛けたところで生徒が答える機会も、意識も、さらにはテーマも生じなかった。だからこそ、生徒は自分のことにしか興味を示さず、自己の世界に閉じこもりがちだったのではないだろうか。

問題は、そうした生徒一人ひとりの生活意識のところへ、授業担当者がどのように踏み込んでいけるかということだろう。なぜなら、与えるべき、そして頼るべき教材のない状況の中で、担当者はあらかじめどこかで決められた答えを用意することはできないからだ。

むしろ自らの問いを立て、この問いの答えを見つけ出す作業を通して、生徒自身が自分のことばを発見するのを担当者は側面からサポートするしかない。担当者もその答えがどこにあるかはわからない。それこそが、問題を発見し解決する学習のあるべき姿なのかもしれない。

### 情報をわがこととする力

教室においては、優れた教材を教えることが必要だと考えられてきた。いい教材がなければ教えられない、いい授業のためには優れた教材が必要という教師の声はまさ

にこのことを反映していると思われる。

しかし、本当にそれでいいのだろうか。

人はいろいろな場面・状況の中で他者とコミュニケーションしながら生きている。この複合的かつ重層的な場面連続の中でことばは獲得されていく。この場合を考える

と、必要なのは、情報としての「教材」ではなく、身辺のさまざまな情報をことばによる学習によって、わがこととして考えていく力ではないだろうか。

教育の主体が教師であるのに対し、ことばによる学習の主体はあくまでも生徒自身である。しかも、生徒にとって一番重要なことは、自分の「考えていること」を、ことばを用いて表現しようとするところにあることだ。このとき担当者のできることにいえば、教室という空間でどのようにして生徒自身の「言いたいこと」を見いださせ、それを本人にいかに表示させるか、である。だからこそ、「考えていること」「言いたいこと」を表すことばは生徒個人の中にあるのだ。

### 教材・技術では、ことばの力はつかない

教材を与え、それを解釈させるだけでは生徒自身のことばの力はつかない。また、ことばを自己の中にあると認めつつ、それを表すのに必要なことが単なる技術とのみ

考えるならば、それは思考とはかわりがなくなり、言語運用技術として学習させればいいことになる。しかし、現実にはそのような知識や技術だから生徒一人ひとりのことばの力はつかないことは担当者ならだれにでも体験的にわかっているはずだ。

では、生徒自身が何かを考えた結果、なにがしかのテーマの発見をすることを通じて、そのテーマを見いだし、能力を高めるためには、自らのことばを用いて考え、表現できる言語活動の場、すなわち生徒にとって、具体的なコミュニケーションの環境が設定されることが必要となる。

つまり、生徒と担当者が対等の立場で、ダイナミックな言語活動に参加する場を形成するための方法論は、いかにして生徒のための言語学習環境を設定するか、という問題に集約されるのではなからうか。

### 問題を発見し解決する学習とは？

生徒一人ひとりが自分のやりたいことを探し、そのテーマに基づいて活動する中で、何らかの形で生徒自身の自己表現を呼ぶことになろう。この場合、生徒が問題を発見し解決する筋道自体は、担当者がある程度つくってやらなければならない。

たとえば、レポート集作成という活動の

場合、自己紹介に始まり、それぞれのテーマ設定、取材、クラス発表、討論、推敲、提出、相互評価といった一連の活動の枠組みはすでにできているわけだから、その後の「何をテーマにするか」は、生徒一人ひとりの提案を待つしかない。

この問題発見解決学習は、今までの教室にありがちだった即座の反応を期待しない。もちろん、生徒のつくりだす意図と場面に応じた適切な表現をこちらから提示することとはあるけれども、その表現教育が目的ではないからだ。一定の限られた期間内で、生徒自身が自分で考え、その考えたことを自分のことばで表現するのを担当者はじっと待つのだ。生徒のことばは、ただたどしくてもかまわない、あるいは間違っているかもしれない。

コミュニケーション活動能力を獲得するのは、生徒自身であり、そしてそれは、生徒自身が自らの考えていることを他者に向けて表現しようとする意思において、はじめて立ち現れる能力ではないか。話し手としての生徒が自分自身の思考と表現をどう結ぶかということに直面したとき得られる力でもあるはずだ。

### 自分の居場所としての教室

このように、コミュニケーションの場面

で、わたしたちが問題にしなければならぬのは、架空の存在としての「社会」ではなく、具体的な対話者の「他者性」そのもののだろう。だからこそ、コミュニケーション活動能力を育てる言語教育とは、個を含めた、さまざまな社会形成の中で自己表現を果たすこと、すなわち他者とのコミュニケーションによって自己を実現する力をつけることであり、そのことによって、自分が自分としてあることを確認できるような、もっと簡単に言えば、「ここにおいてよかった」という自分の居場所としての認識を持つことなのだ。

自分の居場所としての認識とは、さまざまな他者との出会いでの種々のズレあるいは違和感を経験することによって成り立つとも言える。この場合、ズレあるいは違和感は、解消されるべき障害やトラブルなのではなく、人間のコミュニケーションに当然あるべきこととして把握される事柄である。なぜなら、場面認識はすべて話者の世界のことからであり、こうしたすべての差異があつてはじめてコミュニケーションが成立すると言えるからだ。そこでは、「人はすべて同じ、しかし、すべて違う」という態度が必要となる。そのような認識態度がなければ、異なるものに対して柔軟に対応することはできない。

あなたは信頼できる他者となりえるか

コミュニケーションにおける「異なるもの」として他者を捉えることは、新しい個と個の信頼関係における、ゆるやかで友好的な連帯を創造することもある。そして、その他者とのコミュニケーション活動能力を体得しようとする生徒のために、学習空間をどのように組織化し一人ひとりをいかに支援していくことができるかが、ことばの教室とその担当者に与えられた使命だと言えらるだろう。

そのとき、生徒の目線で彼ら一人ひとりの話をじっくりと聞き、信頼できる一人の他者として生徒の前に確固として存在しなければならぬのは、他ならぬあなた自身なのだから。

ほそかわ ひでお 早稲田大学大学院日本語教育研究科教授。専門は、言語文化教育論。母語としての国語教育と第二言語としての日本語教育の接点を模索しつつ、新しい言語教育のための設計デザインと実施プランの作成を提案している。著書に、『日本語教育は何をめざすかー言語文化教育の理論と実践』明石書店 二〇〇二年)、『研究計画書デザインー大学院入試から修士論文完成まで』(東京図書 二〇〇六年)など多数。